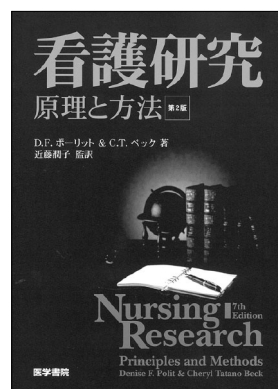


『看護研究 原理と方法 第2版』 質的研究と量的研究の 対話によって進化した 看護研究の新しいバイブル

著：D. F. ボーリット・C. T. ベック／監訳：近藤潤子
定価：9,975 円(本体 9,500 円＋税 5%)
発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



本書の第1版は、言わずと知れた看護研究のバイブルであり、私自身も「辞書」のように活用してきた。質的研究の解説が大幅に増えたという本書の発刊を知り、単純な増章を予測して手にしたところ、まったく新しいタイプの本へ進化していることに圧倒されることになった。

まず気づかされるのは、実証主義や自然主義といった複数のパラダイムは、互いに長所と限界を補足し合う関係にある、という著者の一貫した態度である。したがって、本書の大部分は、質的研究と量的研究が独立した章に分かれているどころか、一つの節や文章の中にも同時に登場するのである。両研究手法が並行し、交差しながら論じられているところが本書の最大の特徴であり、他の書と一線を画するところである。それゆえ、1つの用語や手法について手取り早く学ぶという「辞書」的な使い方では、本書の魅力を存分に味わえない。ここは第1章からじっくり読んでみることをお勧めする。

第I部では、まず研究者が最初に十分理解しておくべき哲学的基盤が記されている。それをふまえたうえで質・量的研究を常に対比させながら、重要な概念と用語が整理され、研究プロセスの概観が示される。第II部では、臨床現場の身近な疑問が、質・量的研究の両方に精通した著者によって研究設問や仮説へと発展していく思考のプ

ロセスを学ぶことができる。さらに、概念モデルと理論の解説が強化された本書の前半部分は、特に、泳ぎ方を知らずに海に飛び込んでしまった気持ちで日夜研究手法の学習と格闘している初学者にとって必読の部分である。

第III部より、マルチメソッドを含む多様な研究デザインが示され、第IV・V部では研究のステップにそって質・量的研究が交互に詳説されている。怒涛のような用語の羅列に怯むが、豊富な研究例と語り口調の助言、各章ごとのシンプルな要約が理解を助けてくれる。第VI・VII部では、研究計画から学位審査・学会発表・投稿にまで大いに役立つ実践術が示される。さらに研究者の果たすべき役割としてEBPの活用に至った最終章では、エビデンスに基づく看護実践を構築するという著者の堅牢な信念が窺える。

看護研究に携わる者の多くは、限られた時間の中で、自らの研究課題にそって選択した研究手法の習得に焦点を絞らざるを得ない。しかし、看護が直面する複雑な現象を明らかにするためには、最適なパラダイムに基づいた研究方法を自由に選択して使いこなせる力が不可欠であることに、私たちは気づいている。

終始一徹して質的研究と量的研究の対話を試みた著者の新しい挑戦から生まれた本書は、全ての看護研究者が手に取るに値すると確信する。